頼山陽研究叢書第一編

頼山陽先生の眞骨頭

頼山陽先生遺蹟顕彰会編

625
340

625-340
1200501539183

賴山陽先生の眞骨頭

賴山陽研究叢書　第一編

賴山陽先生一代の志業は文章報國に在り。されば先生の遺著文献等を公刊して、其の精神を紹述することは、本會の大なる使命であらねばならぬ。本會は旣に其の主要事業たる『賴山陽全書』の刊行を完成したが、將來更に先生に關する新舊の文献資料等を『賴山陽研究叢書』なる題名の下に網羅して、逐次刊行する計畫である。而して今回先づ、廣島文理科大學教授北村澤吉先生の「賴山陽先生に關する感想」を印刷に附し、以て同志の一粲に供する。

625-340

賴山陽の春秋遼豕錄を讀み始めて其の總腦を攫み眞骨頭を見る

文學博士　北村澤吉

山陽先生の百年祭記念出版たる其の全書が此頃全部刊行濟みとなつたので、其れを一覽してみると、其の中に意外にも三四の珍しい著述が新たに採收せられてゐる。卽ち其の春秋遼豕錄とか、山陽先生一夜話とか、藝圃茗談とか、孰れも賴家其の他に今迄長く秘藏せられて來たもので、之を觀た人は恐らくは極めて少數の者だけであつたであらう。顧みるに山陽先生の人物と詩文章などについては、從來世評區々紛々で、其れについては殆んど專門的研究の結果を發表された著述も少くはない。然し近來先生に向つて同情ある研究は餘程深切となつて來て、先生生前の當時から久しく一般人に放蕩輕薄の所謂三文文士の類と餘り違はない樣に見られてゐた誤解の如きものは、今や概ね掃き清められて、愈々其の眞面目が發揮せられる樣になつて來てゐる。但だ、其の眞面目といふのも、多くは世の文人連中の方から觀たものが主となつてゐるので、矢張り先生を以つて普通一般の文士中に傑出したる作者の位置を認めるといふのが落である。此の位置は確に先生の占めて失はないものであるといふ事は、此度出た新材料に據つても益々之を確實にする。卽ち其の藝圃茗談の如きは先生二十四歲の時作られた文章上の私見であるが、此に據つても其の如何に早く文章を以つて一代の全生命とされたかとい

ふ事が窺はれる。然るに一度彼の遼豕錄を披いて之を觀るに及んでは、始めて從來の單純なる文士觀を一變して、更に廣く深く先生の學問思想の根柢淵源を攫み得たるかの感がある。即ち吾々は此によつて單純なる文豪とのみ見て濟まして置く事が出來ぬ樣になつて來たのである。此は是非とも經學とか儒學などの方面よりして、其の價値と位置とを考察して來なくては、到底先生の全體を盡す事が出來ないのみならず、又斯くしてこそ吾々は始めて先生の總腦を攫み眞骨頭を見る事が出來、彼の外史や政紀の如き幾多の著述も、孰れも畢竟、皆此の總腦眞骨頭より分派したる枝節に過ぎない、といふ事が明白にされることが判つた。特に此書は先生が政紀の論述中に纒められたもので、其の稿本の出來たのは、其の五十三歳にて死去された前僅か三ヶ年間であつた。一般世人の見て先生最後の主要產物としてゐる彼の政紀を作りつゝあつた傍、務めて病を犯しながら、斯の如き常人より觀れば殆んど老人の閑事業にも似たる一著述を殘されてゐるのは、深き仔細理由が無くてならうか。

先づ此の春秋の書の大體の性質に就いて言つて置かう。春秋といふのは二千四五百年の昔、彼の孔子が作られた書物の名だ。當時は一般に國の歷史を呼んで春秋といつた。孔子は魯の人であつたので、魯の國史を主として他の列國の重要なる事件をも之に結び付け、さうして、其れ等を當時周の大國家の天子の在まして、中央主權の存せる、王室に繫ぎ合して行つて、所謂王道の大精神を此の史書の中に寓した。此の書を作る時の基礎材料となつたものは矢張り魯の國に昔から傳はつてゐた國史であるが、其の國史の編纂の方法、文章の體裁、文字の用法等が極めて亂雜で往々大義名分を沒却してゐるのを慨して、自ら筆を執つて極めて謹嚴なる立場から其れに修正を加へられたのである。全體の記事は彼の宋の王安石が斷爛朝報と評したる如く、年月日の下に甚だ簡單なる字句を用ひて史上の事實を斷片的に擧げてあるに過ぎない。其の中には少しも議論めいた樣な事は言つてない。然し其の斷片的の事實の記錄の仕方、即ち其の筆法によつて、一字一句を苟（いやしく）もしてゐないので、之を讀んで其の意義精神の在る所を理解せんが爲めには、一通りの事では出來ない。そこで後世

遂に此の一種の歷史の書物が、專門の研究を要するものとなり、所謂經學として取扱はれる事となつた。而して所謂經學には、彼の易や書や詩やと共に六經といふものがあつて、此等は孰れも孔子が整理されたといふ事になつてゐるが、中でも此の春秋は書經と同じく、元來歷史の書ではあるが、特に孔子の王道の大義を寓してあるといふので、孔子其の人の大精神、大主張を見るには最も重要なる經書となつてゐる。故に孔子の言はれた言葉として、「我が志は春秋に在り。」とまで曰はれてゐる程だ。そこで後世では經學の中に特種の春秋學といふものが起つて來る事となつた。

さて此處に先づ一通り此の春秋學發達の次第から見て行かう。一般に略（ほゞ）知られてゐる如く、春秋の本文を輔けて、解釋理會を得しむるがために、公羊・穀梁・左氏の所謂三傳といふものが漢代から世に出て、今日迄傳へられ、中にも左傳の如きは今猶ほ諸學校の教科として我が國にも使用されてゐるが、此の左傳は他の二傳に較べて最も記事が精しいのみならず、文章が甚だ立派であるがために、多くの人に愛讀されたものである。然るに孔子の春秋の所謂「大いに正に居りて一統を大にする。」といふ王政王道の大精神を端的に發揮したものは、寧ろ公羊傳の方であつて、此は春秋の中の一字一句を摘み出して、問答體、討論體に書いたもので、左傳とは大いに異つてゐる。穀梁は只だ素朴簡約なる記錄を本文の後に附け加へたまでに過ぎない。要するに、三傳各々其の特色を以つて互に相參考して春秋經の本文を研鑽する資料とするに足るものだ。そこで天下國家が割合無事である間は多くは此の三傳を讀誦解釋して專ら一般の文學的著作と同樣に取扱はれて來てゐるのであるが、一旦天下國家に一大變動を來すか、又は來さんとするかの場合となつては、單に三傳の文章の中ばかりに優遊玩味してゐる事は出來なくなつて、直ちに本文へ突入して其の大精神をそれ〴〵の時代、それ〴〵の時勢の上に復活さして來ようと努力する事となる。彼の周末戰國の後を受けて崛起した漢が、天下統一の大事業を行ふ際に、先づ公羊傳などが出て來たのみならず、次いで董仲舒の春秋繁露が武帝の時に出て來て、公羊の所謂大一統「一統を大にする」といふ趣旨を實際に發揚して孔子の王道思想を以つて當時混亂せる思想界を統一し、殆んど其の前の三代を凌駕する迄國勢を

隆盛ならしめた。其の後彼の宋の時代になつて、當時の外國所謂夷狄のために絶えず非常なる侵略を蒙り、國內は未曾有の大變を來したので、此の春秋學が勃然として復興して來てゐる。卽ち孔子の居られた曲阜に遠からぬ泰山の下に書院を建てゝ學生を導いて居つた孫復といふ人が、先づ第一着に春秋尊王發微といふ書物を發表して、大いに孔子の王道思想を發揚しやうとした。次で胡安國といふ人が春秋集傳を出して、益々此の思想を鼓吹した。此の集傳といふ書物は其後日本へも渡り飜刻迄せられて、我が國が西洋各國と交涉を始めた頃からは最も廣く一般人士の間に讀まれたものであるが、其の議論は甚だ嚴肅で寧ろ苛酷に失してゐるといふ程、內外君臣間の大義名分を明かにしようとしたものである。又次で宋の國勢が益々微弱となつた時に、彼の有名なる朱晦庵の通鑑綱目といふものが世に出て、此は早くも我が國、南北朝時代から傳つて來て、北畠親房の神皇正統紀や、水戶の德川光圀の大日本史などに影響を與へたものである。此の書物は司馬光の通鑑を本として出來たもので、直接に春秋其物を取扱つたのではないが、然し其の精神とする所は春秋に基いてゐるので、矢張り春秋學の中に入るべきものだ。それから後、支那に於ける此に關する學問としては、淸朝時代となつて所謂考證學派の硏究の一科となつて來たが、其の最も力を入れて考證し穿鑿した所は專ら所謂三傳であつて、其の解說する所は殆んど精細を極めてゐるといつてもよいのであるが、然し眞の意義に於ける所謂春秋學といふものゝ主要とすべき、斯經本文の大精神は、却つて等閑に附せられてゐる趣がある。のみならず、寧ろ此の大精神に反對したる一種の春秋學が別に發達して來てゐる。其れは所謂春秋今文學派又は公羊學派と呼ばれるもので、專ら漢代の今文で書かれた書物をのみ偏重して、其れより以前に出て居つた書物を餘り信用しない。卽ち春秋の硏究に於ても、專ら漢代に新に出來た公羊傳のみを根據として敷衍を事とするもので、隨つて又漢の末に至つて公羊傳の注を書いた何休といふ人の想像說を重要視して、左傳の如きものは古く、略ぼ孔子時代の左氏から出た傳であるからとて、一般に信ずべからざる古文の一つとして排斥して顧みない。彼の何休の見解に據ると、公羊傳は專ら周末に革命をして天下を統一した漢代を理想としてゐるものであると

て、種々牽强附會、怪しむべき說を加へ、極力、漢代當時の革命を辯護したものである。隨つて其の思想を推し進めて孔子の春秋經の本文の精神迄へも結び附けて、さもありしがごとく說いて行くのである。此の一派の見解を傳へた所謂、今文公羊學派は、莊存與とか宋翔鳳、劉逢祿とかなどいふ學者があつて、淸朝の一般考證學の間に潛在して、其の見解は一種の暗流をなして次第に學界より延いて一般思想界に及ぼし、遂に淸末の革命運動となつて現れて來るやうになつた。其の革命の少し前に於ける當時の代表者は廖平や、康有爲の如き者がそれだ。

次で我が國に於ける春秋學の狀況を通觀するに、支那とは大いに其の趣を異にしてゐる所がある。卽ち彼の王朝時代に於て制度文物の一時に勃興して隆盛を見た時に出た大寶の學令の中に、旣に當時の學校に採用した學科目が出てゐるが、其の經學の科目は大體唐の學制に規定されてあるものに依つたものであれど、然し多少の相違を示してゐる。卽ち春秋三傳は唐に於ては全部學官に立てられたものであるのに、日本に於ては、公羊・穀梁を省いて左傳のみを採用する事となつてゐる。此は恰かも其の諸子の中で老子は唐に於ては最も重んぜられたに對して、日本に於ては削除してあるのと似てゐる。今其の理由を少し考へて見るに、老子は唐の天子の祖先の出た者として當時特に尊敬せられて居つたもので、之を重要視したのは尤もな譯だ。又日本に於て公羊の如きものを削除したのは、恐らくは、彼の何休の注が累を人心に及ぼさんことを恐れたがためではないかと思はれる。但だ其の後延曆の頃になつては、遣唐使などの請ひによつて、一時公羊傳なども採用を許した事はあるが、此は彼我の交際上必要なる知識を得るがための手段として用ひられたのに過ぎないやうだ。兎にも角にも日本では公羊傳の如きは餘り重んぜられるには至らなかつたのである。それで一般の硏究としては、矢張り左傳を主として行くといふことが古今を通じた定例となつて來てゐる。凡そ官學としては支那日本を問はず、主として左傳に依つて子弟に春秋時代の事實上の知識を與へると共に、文章修辭の學を爲さしめるのが、歷代の主眼とする所であつたが、支那に於ては前述の如く宋朝に至つて春秋本文の硏究が復興して來て、我が國に於ても、南北朝の時勢の變動

に至つて、宋の春秋學を早速引き移して、其の精神思想を我が國史の上に照し合して、活潑なる働きをする事となつた。然るに春秋本文その物に就いては學者的研究といふものは別に大して見るべきものは起つて來なかつた。鎌倉幕府以後、足利氏より織・豊二氏の時代を通じても其の通りで、尙ほ、德川に入り、二百年の永きを經るに至つてもさうであつた。是は何故か。其の譯を考へんがためには、先づ支那の歴史と違つた日本歴史上の事實を知らなくてはならぬ。支那に於ては、國勢の變動は直接に朝廷の變動で、直ぐ天子に繫つてゐるが、日本では朝廷の力は鎌倉以來微弱ではあつても、一系の　皇統は開闢以來連綿として續いて、此に大變革を來す程の事には至らなかつた。而して一方には別に之を輔佐するといふ幕府が、偉大なる權威を持つて嚴然として永く存在して居つた。言ひ換へて見れば、王道政治の下に覇道政治を行ふ所謂二重の政治となつて居つた。而して此の二重の政治の關係は、德川時代の如きは割合に最も順調に運行されて來て居つた。そこで其の間に出て來た普通一般の學者の態度も自然に、忌み憚る所があつて、支那の如き單純卒直なる態度を以つて、正々堂々と一己の意見を當世に發表し、春秋王道主義の大精神を發揮し鼓吹するといふが如き事は、仲々出來難い所もあつたものかと見える。其の間で稍や人の注意を惹いたものは山崎闇齋學派の人々の著述、例へば栗山潛鋒の保建大記と、谷秦山の保建大記打聞や、三宅觀瀾の中興鑑言と、秦山の門人高橋氏の中興鑑言打聞やなどで、此等の書物は、孰れも其の論述の主力を、保元・平治以後、王道の衰頽の點に注いだもので、殆んど、山陽先生の日本外史や日本政記のために豫め先容を爲してゐるやうな趣がある。されど要するに上述せる如き次第で、我が日本國に於ては終に殆んど一人も專門の春秋學者と迄稱するに足る程のものは出て來なかつた、といつてもよいのである。此を憤慨した餘りに、吾が一身の死去に臨んで、明かに全く、後世への遺書とし、置き土產として、始めて私かに之に得意の手筆を下し、最後の全精力を傾注したものが卽ち山陽先生の此の遼豕錄だ。

此の遼豕錄は前にも言つたが如く、專ら歿前三年間に平素の見解を纒められたものであるが、其の歿せられた天保三年秋九月に先きだつ僅に三ケ月前の頃に未了のまゝ置いたもの、卽ち其の積勞のため六月十二日忽ち咯血をした迄努力せられたもので、其の少し後、卽ち九月九日、津藩有造館に出講する猪飼敬所翁の訣別の訪問を受けて、病床に在つて彼の有名なる南北朝正統の大議論をなし、其の結果を政記の後龜山天皇の下に補ひ入れたのと共に、實に先生最後の腦血を灑ぎ盡されたものだ。かゝる次第なれば、遼豕錄の如きは、もと隱公より哀公に至る十二世全部を纒める積りであつたが、漸く十世の宣公迄至りて筆を輟めて、其の殘りの二公に及ぶことを得なかつたのであるが、既に十世について詳論せる以上は餘は推して知るべしとして、先生は左程の遺憾はなかつたらしい。其の事は遼豕錄の先生自作の跋文に言つてある通りだ。曰く。

業に就いて三年、中間しば〳〵母を省するを以て廢輟す。今茲、壬辰の季夏、昭公に至つて吾が疾作る。醫言ふ將に起たざらんとすと。自ら此の事の終らざるを慨す。然るに十二公たゞ其の二を餘すのみ。後世或は吾を知る者有らば、十を以て二を推す、詎ぞ難しとなさんや。

と。然らば此の遼豕錄の述作の大趣旨は何くに在るかといふに、同じく先生の跋文の劈頭に喝破して曰ふ。

宣尼の手筆、疑なき者は獨り春秋のみ。佗は易の彖・象の傳、是のみ。況んや春秋の旨は、我が國に在つては最も識らざるべからざるに似たり。而も未だ專攻する者あらず。余自ら揣らず、憤りを發して窺測す。

と。是れ豈に我が邦人にして春秋の大精神の特に我が國に重要なる大關係あるを認め、獨り自ら決然として古今群儒の中に身を提して、踵を彼の公羊、董仲舒の兩儒に接し、直ちに孔子の堂奧に登り、其の眞精神を掴みとり、之を我が國家のために灑注し來らんと欲する者ではなからうか。其の眼識の高き、抱負の大なる、決心の堅き、既に已に、巍然浩乎として、啻に翩々たる世の所謂文人才子輩の及ぶ所でないのみならず、亦た實に彼の尋常一樣の所謂儒者經學者や、勃窣たる學究者流の徒の到底能く跂求し得る所でもあるまい。

次いで、其の內容何如を見なくてはならぬが、先づその骨組みについての山陽先生自身の見解を聽くに、彼は從來支那に於ける先儒の幾多の類書には、すべて滿足が出來なかつた。彼は別に日本人として國史の事實をも其の中に參入して、開闢以來實際に行はれ來つた王道精神と、春秋の中に寓せる孔子の精神とを共に、一體として看て取り、其れをして益々明瞭ならしめ、益々發揚せしめやうとした。が故に其の方法は、彼の普通學者が多數の材料を收拾して、比較考證に汲々としてゐる如き態度を以て安んずる事は出來得べくもあらず、主として獨自の見識に據つて批判を加へ、紛々たる亂麻を斷つて、一己究竟の鐵案を下す事となつたのである。卽ち其の跋文の中に、

謂へらく、康熙彙纂は群說を一覽すべしと。然るに亦各々本書を覩んと欲し、納喇成德の經解(通志堂經解)に就いて之を檢出するに、堆帙等身、盡く讀む能はずと雖も、而も各々大旨を領す。唯々宋の黃仲炎・元の趙汸の說く所、頗る直截なるを覺ゆ。後、淸の萬斯大の隨筆、方苞の通論を得たり。通論は趙が意に本づくに似て、而も較々簡明なり。其の他は率ね公・穀・胡に出入して枝蔓轇轕なるか、否ずんば則ち務めて相排擊すること、毛奇齡の橫に目例を立て、其の辨博を逞うするが如きに至るのみ。余是に於て姑く諸傳を閣き、獨り正文を熟觀するに、左氏を用つて案を爲さざる能はざるも、猶ほ時に其の妄を覺ゆ。何ぞ況んや其の佗をや。要するに、特に之を臆に取り心の安んずる所を求むるのみ。從游する者、聽くに隨つて之を錄し冊を成す。自ら粗淺にして昔人に比數すべきに非ざるを知る。然も烏んぞ諸を精に失ひて諸を粗に得る者無きを知らんや。又烏んぞ證に誤つて臆に中る者無きを知らんや。

と。曰つてあるのが其の事だ。此の意は尙ほ門人兒玉愼の編せる山陽先生書後の中に收められてある。彼れの春秋正文の後に書せる一文にも見えて居るから、序でに左に擧げて置かう。

春秋の底本は見るべからず。意ふに其の書する所、冠履顚倒、此間の太平記の、天皇謀叛し、親王に一戰功なくして、帝位を將軍より承けたりとせるが如くなりしならんのみ。孔子之を慨歎せしが故に、其の名分稱呼を正し、書冊上に就き略ぼ世界を成さしめ、次で當時人に示せしのみ、王正月と曰ひ、天王某をして來らしむといひ、宰周公を齊侯の上に置きしの類是なり。苟も後儒の言ふ所の如くに褒貶黜陟せしとせば則ち孔子は妄人と爲り、春秋は兒戲と爲らん。唯だ實に據りて直書し、史冊の體面を損じて、明白日月の如く、無心にして而も委曲なること造化の如し。是れ聖人に非ずば修する能はざる者なり。侯・谷、(穀)、恐くは强ひて解事を爲す者、胡氏其の意を祖述し、而も焉に迂刻を加ふ。此より下りて諸儒紛紜たるも、三家の間に出入せるに過ぎず。彼れ此れより善きは則ち之れあるのみ。余の春秋を治むる、刀もて亂絲を斬るの法を用ひ、盡く書傳の葛藤を截去し、獨り正文に據り、要は前後の年月に參し、一條上に就いて之を鑿求せず。遂に二百四十年內を流覽し、當時の大勢大狀を領會すれば則ち聖人の意も窺ひ難からざるなり。

と。其の勢と狀とを以て之に參するを以て一家治經の法とせること、亦た其の詩書正文の後に書せる文に言つてあるのも之と同じことだ。

既に專ら時代の情勢を按じ、獨自一己の見解を以て斷案を下さんとするに、茲に其の唯一の賴みとした所のものがある。何だ。曰く。春秋の筆法。是れだけだ。遼豕錄の凡例に、

春秋の書には、文例あり、特筆あり、隱諱あり。是の三者にしてやむ。文例あつて、以つて彼此の推すべきを知り、特筆あつて以つて大義の係る所を知り、隱諱あつて以つて國惡を言ふに忍びざるを知る。

とあるのが卽ち其の事だ。抑も文なる者は道を載するの器であつて、文王の文は孔子に傳はり、孔子の文は春秋に見ゆ。春秋の文に據つて始めて先王孔子の道を見る事が出來る。故に文を識らざる者は、道を見るに足らぬ。幸にも我が山陽先生の如きは、其の少壯時代よりして早く已に文を以つて生命となし、終始一貫、堅く之を心身に體して一日たりとも離れしめず。此を以つて、彼は、單なる一文人として觀るも、一般世人の許せるが如く、固より古今に傑出したる一大文豪であつた。斯くも素養あり、斯くも洗錬せる手と眼とを有せる人を以つて、聖人の一大遺文の眞精神を窺測するといふこと

は、誠に古今に奇特なる一大遇合であつたに相違あるまい。

春秋の内容は魯の隱公より哀公に至る十二公に關する記事であるが、開卷第一に見えてゐる、『元年。春。王正月。』といふ六字だけで既に二百四十二年間の一切の出來事の大義を包括して擧げられてあるといはれる。然るに此の六字については、既に彼の三傳以下多數の學者の意見解釋が區々まち／＼となつて居つて、孰れが正しくて信賴すべきものであるか容易に決定されない。そこで、後世では却つて種々の雜説のために惑はされて、孔子の大精神に逆行するが如き、彼の前にいつた何休に基ける清朝の今文公羊學派の如き、革命主義を以つて解釋する者さへ出來てゐる程だ。彼等は此の六字の中に在る『王』の字を解釋して魯を指させる者となし、甚しきものは孔子自身を指した者となし、當時の周の國に一革命を行つて、別に新しい一つの王所謂素王なる者が出來て、そして新しき制度を建立する者としてゐるのだ。かくも異端紛出の中へ山陽先生が出て來られて、其の椽大の筆を起して開口第一に先づ言はれたのは左の通り。

是れ夫子の開卷第一の特筆なり。蓋し正朔なる者は王者既に統を命ぜられ天下を一にする所以なり。當時諸侯の用ふる所皆周の正月なり。苟も之を用ふれば朝覲貢賦以つて臣職を致さざるべからざるなり。而して其の周より出るを忘れ臣節を致す者なし。故に夫子先づ之を揭げ、以つて今日の天下に在る者一人として周臣たらざる者なきを示すこと明白著見なりと謂ふべけむ。公羊氏曰く、「元年とは何ぞ。君の始年なりと。」左氏曰く。「春。王。周の正月。」と。公羊氏又曰く、「春とは何ぞ。歳の始なり。王とは孰れをか謂ふ。文王を謂ふなり。曷の爲めに先づ王を言ひて而る後正月を言ふや。王の正月なればなり。何ぞ王の正月を言ふや。一統を大にするなり。」と。是れ皆經旨の一端を得る者なり。或は曰く。「四時に事無ければ則ち首月を書し、事有れば則ち事有るの月を書し首月を書せざるは、是れ文例なり。」と。今三月に事有りて而も特に首月を書し正月を揭ぐる者は何ぞや。曰く。是れ春秋第一義の存する所。故に開卷先づ周正を揭げ出し、以つて天下の大統尙ほ周室に存せるを示す。佗の年に事有るの月を書せる例とは同一に論ずべからざるなり、と。卽位を書せざるは卽位の禮を行はざればなり。故に舊史之を闕ぎ、夫子も亦私意を以つて之を補はざるなり。胡氏云ふ、仲尼之を削れるなり、と。夫子は人臣たり何を以つて其の先君の卽位のことを削ることを得んや。左氏は云ふ、攝（攝政）なればなり、と。果して其の說の如くんば、則ち卽位を書せざるも可なり。而るに國人は公を稱し、會同朝聘にも一も他公の攝せざる者と異るなきに、左氏何を以つて其の攝たるを知るや。解すべからざるなり。歐陽氏之を論じて既に詳かなり。公・穀及び胡傳に論ずる所は皆或は書し、或は書せざるを以つて說を爲すに過ぎず。是れ臆度の見のみ。

と。是れ從來の諸家の異說を批判匡正して、孔子の大中至正なる王道思想の大義を直截明白に揭げ出して來たものではないか。特に、

故に夫子先づ之を揭げて、今日の天下に在る者一人として周臣たらざる者無きを示す。

といへるが如きは、實に彼の外史政紀の筆法寓意の根源する所と見るべきものだ。次いで『夏五月。鄭伯・段に鄢に克つ。』といふ經の本文の下には曰ふ。

段、弟を稱せざるは、段、强大にして、鄭に二君あるが如く、列國皆知る所なればなり。故に弟を稱して之を見はすを待たず。之を足利氏に譬ふれば、設へ高氏をして、其の弟直義を殺さしむるも、直義の高氏の弟たるは、列國の素より知る所にして、史筆者は必ず弟を稱して以つて之を見はさゞるなり。春秋の舊文は亦此の如し。夫子從つて焉を改めざるのみ。克とは、力等しく勢敵し僅かに以つて勝を取るの辭。左傳に云ふ、二君の如し、故に克と曰ふ。と。其の意も亦此の如し。

と。是は主として修辭上の所謂省筆法を以つて論じたものであるが、然し、此等の箇條に據つて此の書も亦彼の「古文典刑」などの專ら文を以つて經を視たるが如きものと同樣のものに過ぎずとして看過してはならぬ。卽ち單に之を文視する

といふ外に、亦、必ず之を經視してゐることを忘れてはならぬ。又次に、「秋七月。天王、宰咺をして來つて惠公仲子の賵を歸らしむ。」といふ經文の下には、

此の時列國强僭して復た周室有るを知らず。思ふに舊史の、周室の事を書せる稱謂は、復た列國と分別なかりしならむ。故に春秋は春、王の正月を以つて筆を起し、次に天王を揚げ、以つて名分の大を明かにするは、是れ夫子の特筆なり、此の書を讀む者二百四十年、當に此の如く讀み去くべし。庶幾くば春秋の大旨を失はざらんか。是れ此の一經著眼の處なり。仲子は之に先つて蓋し薨ぜるならむ。故に併せて二賵を歸れるなり。左氏、下經の夫人子氏薨ずとあるを誤讀して、仲子の事となす。極亂の世と雖も、豈に生者に賵するの理あらんや。是れ左氏顚倒の太甚しき者なり。

とある。是は彼の孔子が嘗て「天に二日無く、地に二王なし。」と言はれたと同じ意味を示したもので、眞に山陽先生の言はれてあるが如く、孔子の特筆大書した所、最も大義名分の繫る所、實に一經著眼の處たるに相違ない。凡そ此の書を讀む者、二百四十二年間、斯くの如くに讀んでこそ、始めて所謂經學者儒者たるに庶幾からう。若し單に尋常文士の眼を以つてすれば、此等の淡々たる少許の字句の中に何の妙趣があらう。唯一片の鐵釘に過ぎないであらう。

「二年。春。公戎に潛に會す。」といへる下にはいふ。

春秋の中には戎狄を書するに爵號を以つてせず。君臣稱を同うし、等異を爲さず。蓋し其の正朔加はらず、禮制及ばざるを以つて之を略するなり。略ぼ戎狄を稱して細悉を加へざるは、即ち中國の戎狄を待つの名分を正す所以なり。而して策書の體裁も亦備はれり。此等の書法は意あつて之を外にするに非ず。自ら至當一定の法あるのみ。何氏曰く、「會を書する者は其の內務を虛うして外交を恃むを惡むなり。」と。大いに夫子の意を得たり。蓋し是れ列國會盟の禍を兼ね說き、特に戎のためにして發するのみに非るなり。列國の會盟するも、夫子猶ほ與（許與）せざる所たり。況んや、其の戎狄に於ける、知るべきなり。然るに夫子特に其の始（法紀壞亂の始、）を書して以つて公を貶するには非ざるなり。史筆の體は事實に從つて之を直書すれば、其の臧否利害も自ら焉に見はる。夫子の、天下の諸侯大夫が、其の名分を失へるを惡めるは、春秋を著す所以なるに、而も己れ人臣たりて、その國君を褒貶すとせば、是れ己れ先づ其の名分を失ふなり、焉んぞ能く人を正さんや。故に春秋褒貶の說は信ずるに足らざるなり。

と。抑々春秋褒貶の說の起れるは頗る古いことで、後世は專ら此の說に據つて其れを極端に迄推し進め、殆んど經文の一字一句に褒貶の意を寓したる筆を下したるものであるとして、一々之に穿鑿を加へ、ために牽强と苛酷な議論を爲す者が增して來たので、それでは却つて後世、人を誤解に導き、或は詭矯過激ならしめ、或は武斷暴發せしむる虞がなしとしない。今實際に修史の事業に筆を執りつゝあつた山陽先生が、斯くの如き頑固偏頗なる見解を排して敢て之を取らなかつたのは尤もで、譯ある事と言はねばならぬ。されば此の所說は、一面よりすれば幕府の治下に於ける先生のためには、一種の自己防衛保護の策ともなつたであらう。たゞ一旦大義名分の決して湮晦すべからざる所となつては、斷々乎として特筆し大書すること、上文に言へるが如き、春秋の筆法を忽にしなかつた。然し所謂特筆大書といふものも必ずしも今日の新聞に特號大の活字を用ひて殊更に人の注意を惹くが如き事をしたのではない。故に次の、「三年。三月。庚戌。天王崩ず。」の下には、

特筆なり。夫子往々特筆を用ふと雖も、然も以て史册の體を成すに過ぎず。史册の體を正せば則ち特筆焉に見る。

といつてある如く、たゞ正當なる筆法を用ひて筆すべきを筆し、筆すべからざるを筆しないならば、特筆も自ら其の中に現れる譯で、亦それが即ち修史の已むべからざる譯になるので、筆すべきを筆せず、筆すべからざるを筆してゐる世界の史料が、此の義理に依つて修正されたといふ迄の事である。然し後世、學者識者間の議論の多きに至つては、もはや、春秋の如き簡單なる文句の中に微言大義を見てゐるといふ餘裕はなくなつて來た。そこで彼の編年體の書物の中にも間々沈痛壯烈なる論文を挿んで讀者の注意を喚起し、人心を震動さした譯だ。例へば、外史の開卷第一の「平氏は桓武天皇より

出づ」といふ記事の前に劈頭に題せられたる論文に、

　吾れ舊志を讀み、鳥羽帝の時數々符を下し、諸州の武士の源平二氏に屬するを禁ずるを見て曰く、「大權の將門に歸するや、其れ此の時に在るか」と。三善淸行の封事に、宿衞豪横の患を陳べたるを讀むに及び、乃ち知る、制度の弊、其の來ること久しく、啻に此に始るに非ざるなり。

とあるのは、春秋の始りの隱公の時が、周の平王の朝廷の政治が陵夷した時に起つてゐるのと對照して相通ずる所のある感慨ではないか。又楠氏の處に至つては、曰つてある。

　予、將門の史を修め、平治承久の際に至り、未だ嘗て筆を舍てゝ嘆ぜずんばあらざるなり、嗚呼、世道の變、名實の相讐らざる、一に此に至るか。古の所謂武臣なるものは、勤王と云ふのみ。云々。

と。先生歿せる後數十年の間に於いて直接維新志士の標語となつたのは、卽ち此の「勤王」の二字に外ならぬ。志士の中にも特に平井隈山の日錄たる隈山春秋の如きは、實に山陽先生の典型の躍如として見るべきものだ。又政紀の後龜山天皇の條の後に加へられたる、先生の死際最後の一文には、

　於戲、今の朝廷は、神武以還大一統の朝廷なり。何を以つて北と曰ふ。北と曰ふ者は延元・元中の間、天子南遷して、賊臣私に君を立つ。この時に當り南は則ち正しく、北は則ち僞なり。南につかふるは榮なり。北に事ふるは辱なり。故に其の稱を別たざるを得ざるなり。已にして天その禍を悔ひ、祖宗その衷を誘ひ、和議を講じ、南北の混一を成せり。それ後龜山の瑣尾流離を以つて其の神器を授くるや、肯て降式に從はず。必ず父子の禮を用ひたり。足利義滿の兇威にして而も奪ふ能はざるなり。是に於て後小松始めて器を傳へ禪を受く。後龜山を尊みて太上天皇となす。事懿禮善、以つて此より前の分派の陋を盪滌し、上は列聖の統を受け、下は後世に顯示するに足れり。蓋し、天と祖宗と實に之を佑く、足利氏の能く爲す所にあらざるなり。其の後、內に紛紜ありと雖も、而も天命大いに定り、以つて今に至る。賊臣

の輦轂に蟠居して朝廷を濁亂する百餘年なるもの、畢く誅竄に伏す。朝廷其の淸明に復し、その一統を大にす。日月の再び天に中して、山河皆明かなるが如きなり。而して何を苦しみてか、なほその口吻を汚し、北と曰ひ、北と曰はんや。云々。

とある。是は正に遼豕錄の特筆と相表裏して、孔子から直下一瀉し、來れる所謂大一統の王道の眞腦髓を抉出して示されたものといつてよからう。又外史の足利氏の論文には、

　源氏は王土を攘みて王臣を摟く者なり。足利氏は王土を奪ひて、王臣を役する者なり。故に足利氏の罪を論ずれば源氏に浮ぐ。

とある。倘ほ、政紀の應神天皇の條の下に在る論文に於いて、吾々は一層よく此の春秋王道の大義の宣揚が我國に重要なりとする先生の意見の根據を審にする事が出來やう。曰ふ。

　道は一のみ。道の天下に在るや、猶ほ日月の若し。日月は天下の日月なり。一國の私用する所にあらず。道も亦然り。父子、君臣、夫婦、國として無きはなし。而して慈・孝・忠・義・別ありて雜らず。皆自然に存して人作に待つあるとこあらざるなり。我が邦列聖、民を保つこと子の如く、堯舜禹湯に讓らず。其の風俗、君を尊み、上に親み、相愛し、相養ふ。又唐虞三代の民に過ぐるあり。則ち經籍なしと雖も、其の道は固より是に在り。特に未だ名けて之に敎へ、仁と曰ひ、義といふものあらざるのみ。譬へば人家の如し。同く是れ一里なり。而して之に居るに舊あり新あり。某巷陌、某井溝、皆名目あり。記するに帳籍を以つてす。新者必ず舊者に問ひて之を知る。舊者曰く、「是れ吾が巷陌井溝なり。」と。可ならんや。今天下の仁義なり。儒者、指して之を私して曰く、「是れ漢の道なり。」と。國學者と稱する者あり。斥けて之を外にし曰く、「是れ我の道にあらざるなり。」と。皆非なり。道豈に彼此あらんや。之を載するに文を以つてすること、彼較々我より舊し。彼來りて之を貢し、我取りて之を用ふ。釀治織縫の工と何ぞ異らん。載籍は織縫

釀治なり。而して仁義は蠶なり、桑なり、麴米なり、銅鐵なり。蠶桑麴米銅鐵を以つて彼より來るとなす者は儒者の見なり。織縫釀治を廢せんと欲する者は國學者の說なり。故に曰く、皆非なりと。夫の道は一なれば則ち學も亦一なり。寧んぞ所謂國といふものあらんや。陋なるかな。且つ、夫の先王之を取りて之を用ひ、著して令典となしたるに而も敢て之を非議す。是れ先王の典を議する者、幸にして誅を免るゝのみ。

と。說き得て、剴切透徹といふべきだ。

尙ほ、遼豕錄の中で讀者の先づ注目すべきもの二三個條を擧げて置かう。桓公二年の、「春。王の正月。戊申。宋督、其の君たる與夷を弑し、其の大夫の孔父に及ぶ。」の下には曰ふ。

夫子、隣國簒弑の事に於ける、意を極め、事を備にして之を書する秋霜烈日の如し。其の意獨り以つて、華父督の罪を正すのみに非ざるなり。蓋し簒弑の人には、其の書法此の如くならざるべからず。而も桓公の事に於ては、獨り隱微に之を書せるは、徒に國惡を諱むを以つての故のみ。その實は宋督に異ならざるなり。春秋の筆法此の如し。亦以つて夫子桓公の事を書けるの苦心を見るべきなり。

と。四年の「春。正月。公、郎に狩す。」の下には曰ふ。

公羊氏云ふ、「狩は常事には書せざるに此は何を以つて書するか。譏するなり。何をか譏する。遠なればなり。」と。胡氏も亦以つて之を譏すとなす。諸侯の狩蒐は常禮には必ずしも書せずとして、公羊氏の說を實にす。こゝに特書する者は、桓公一代に此の一擧を最盛となす。譬へば猶ほ幕府の小金ケ原の狩のごとし。以つて非常を記する所以なり。褒貶に意有るに非ざるなり。蓋し、前年に夫人を迎へ、今年叉此の擧あり。而も日用餘りある者は、去秋、年有りし(豐年)を以つてのみ。

と。「夏。天王。宰の渠、伯の糾をして來聘せしむ。」の下には曰ふ。

王朝の公卿は、爵を書するを例となす。左氏云ふ、「父在す。故に名いふ。」と。而るに信ずべからざるなり。案ずるに、舊史此等に於いて、「天王の使むる。」を言はず。恐らくば、周使と言ひしならむ。故に夫子特筆して、今の文に改めしならむ。是れ、其の大體の處、必ずしも伯糾の姓名を辨ぜざるなり。

と。僖公。十有八年の、「春。王の正月。宋公・曹伯・衞人・邦人・齊を伐つ。」の下には曰ふ。

桓公一たび歿してより、諸夏潰裂、亂麻の如し。桓公一時の盛を見はす所以、亦霸者の以つて王者の治に及ばざるを見はす所以なり。

と。文公十四年の「晉人、捷菑を邾に納れ、納るゝ克はず。」の下には曰ふ。

小國邾の如きも、一旦、義に據つて人を拒げば、則ち盟主たるべき者、八百乘の衆を以つてするも、之に强ふること能はざるは、當時の小國、やゝもすれば大國の凌轢を被り、自ら振ふこと能はざるは、皆義を以つて事に從ふこと能はざるがためなるを見はす所以なり。左・公・胡の三傳、納るゝこと能はざるを以つて趙盾を美すとなすも、聖人の春秋を作る、應に此の如きの迂ならざるべからざるなり。左傳に、「周公將に王孫蘇と晉に訟へんとせしに、王、王孫蘇に叛く。」と云ふ。此等は以つて舊史の顚倒錯謬を見るべからむ。蓋し、國史に、北條・足利の事を載するに、其の王家の事に於て、之に類するもの多し。故に舊史を知るに非ずんば、則ち聖人の筆刪の在る所も、以つて見るべからざるなり。

と。以上は二百二十頁もある本錄の僅に一小部分を摘出したるに過ぎないが、讀者は宜しく一斑を以つて全豹を推すべく、その細密なる事は專門の學者の熟讀研究に讓つて置かう。

抑も、經學といふものにも、種々の方法があつて、人々必ずしも一樣の態度方法を執るものではない。今山陽先生の研究せられた立場を見るには、其の自ら遼豕錄の原の跋文に加へられた左の一文に據つて之を知るに如くものはなからう。

今に在つて經を治むるに四病あり。正文を閣きて先づ註を讀むを、註に憑る、と曰ふ。注妥たらざるを覺ゆるも、寧

ろ經に繆つとも、敢て注に違はざるを、注に佞す、と曰ふ。未だ注の意を繹ねず、胸に爭氣を横たへ、一語合はざるも訴りて疵類となすを、注に仇す、と曰ふ。新義を竪てんと欲し、勦說に歸するを恥ぢ、乃ち盡く羣注を檢すること、帳簿を稽ふるが如きを、注に役せらるといふ。夫の注は經を解するを期し、經は已のためにするを期す。余の經を治むる唯だ心に安んじ身に補ひあるを求むるのみ。故に正文を熟玩し、その注に於けるや、敢て憑らず、敢て佞せず、又仇と役とに事とするなきなり。毎に謂へらく、昔人吾に代つて精を費す。吾以つて已むべきに、以つて已むべからずしていふは、或は其の既にいふ所にして、而も吾未だ之を視ざるに出れば、適々心の同く然る所を見るに足るがためのみ。且つ勦と否とは、辭氣自ら掩ふべからず。苟も實見に出でば、必ず小補あり。何ぞ必ずしも陳編を攤排すること、獺の魚を祭るが如くせんや。近ごろ從遊するもの、平日說く所を錄し、來つて名を問ふ。余、朱浮が彭寵に謂へる語を取りて、題して遼豕と曰ふ。蓋し豕たるを妨げず、獺たるに暇あらざるなり。

と。謂ふ所の、注に憑るもの、注に佞するものとは、唐宋以後の一般の俗經學者を指し、注に仇す、注に役せらるといふ者は、清朝の考證學派の徒を指したであらう。先生の經を治むるの法は、以上の四病を擺脱して、專ら本經の正文を熟玩し、その實見を得るに在るのみ。故に必ずしも當時の所謂經學者輩の徒に博引傍證を事とすること、獺の魚を祭るが如くなるを欲せず。寧ろ遼東の豕たるを以つて自ら安んじた譯だ。原と本書に題して春秋臆斷としてあつたのを、後に今の如く改名した。其の意も亦知るべきだ。

余は毎に疑つて居つた。文化文政より天保に及べるの間に於ては、詩文の學鬱として起り、經學は元祿享保の盛に及ばざるも、尙ほ清朝考證學の影響を受けて一時の盛を現したが、中にも江戶に於ける太田錦城、京都に於ける猪飼敬所は、當時兩京に於ける兩巨頭ともいはるべき人であつた。而して此の兩人が、倶に其の負へる盛名をも忘れ、恰も揃ひもそろつた其の傲岸の氣を下し、彼の市井の間に落魄し「燒芋屋の看板書き」とまで呼ばれた一介の山陽先生を、わざ〱水西莊の僻隅に訪問して來られてゐるは、不可思議なる事件ではないかと、然るに今、先生歿後百年間、終に復と第二の白河樂翁公の如き有力者を得ざりしがため、永く學界の淵底に沈まされつゝあつた此の遼豕錄も、幸に記念出版の一擧に依つて始めて學界の表面に萬丈の光焰を放つて忽然として現出し來り、之に加ふるに上述の如き一家獨自研究方法をすら持つて居られたことを知るに及んで、前の疑團は始めて全く渙然氷釋することが出來た。彼の博覽を以つて當時の經學者流を睥睨したる兩巨頭にして、尙ほ且つ此の挿架寥落、僅かに他家の藏書を借讀せしに過ぎざりし山陽先生を尋ねて議論を上下し、彼よりして何等かの聽くべきものがあつたに相違なからうといふことを知つたならば、先生の經學、特に其の春秋學に於て確に獨自一己の造詣があつたからであらうといふことも、亦殆んど疑ふべくもない。果然、先生が敬所翁の伊勢に往くを送るの詩の序に、「老丈來りて病牀に就いて對座し經史を商榷す。往々、兩心對照し、愉快以て疾疢を忘るべし。」(敬所行狀記所載)とあり、その詩に、暮年逾覺知音重。篤疾殊知分手難。獨有精神永不死。時於書卷數相觀。とあるは、乃ち確かに此間の消息を示してゐるではないか。敬所翁答酬の作に至つては、更に妙なるものがある。曰く、「學究文人風操異。議論吻合又何奇。」と。學究と文人、直ちに世上月旦の語を甘受して、自から嘲るが如く誇るが如きもの、其れ然り、豈に其れ眞に然らんや。兎にも角にも、斯る次第なりしを以て、世人はその平生齋藤拙堂や篠崎小竹や田能村竹田やの如き文人者流と多く交際せる一面のみを觀て、全く其れ等の仲間より出でざる單純なる文人才子としてゐたのも尤もであるとしても、それだけではまだ〱眞に此の一世の大「迂拙男兒」(先生の自稱)の總腦眞骨頭を知つて居つたものではなかつたのだ。但だ世には之を文人とする外に、一種の史家、又は史學家として認めてゐるものもないではない。さて彼の史學の研究方法も、猶ほ經學のそれのごとく、若しも今日所謂一般の史學家輩のなせる如く、徹頭徹尾專ら史料の收拾と考證とを以つて本事とせる其の中に在つて、猶ほ先生のごとき特種一流の史學家もあり得る事を許すならば、世の所謂經學者といふ者の中にも先生の如き一經學者あることを容れなくてはなるまい。然り而して經學といふものは、實に我が

儒學の基礎根柢をなすものとして、最も重要なるものである。先生の彼の排空回天の文氣も、本づき據る所は實に此處に在つたのでなくてはならぬ。是を以て之を觀れば、彼の所謂儒者又は儒學者といふ者の中に於ても、亦先生に其の一個特種獨立の位置を與へなくてはなるまい。更に一歩を進めて、之を極言すれば、通俗一般の陋儒腐儒の外に、寧ろ卓然屹立せる通儒達儒の一人として之を認めねばなるまい。假に若し先生の著作にして、獨り此の遂豕錄のみ世に存して、其の他一切のもの亡からしめむか、後世の學界は必ずや我國唯一の藝州春秋經學者の撰述として、之を珍重せしならむ。而も事實は全く然らずして、其の通儒達儒として種々の方面に放射したる彼れの精采は、かへつて、人をして、未だ其の眞骨頭を見得ざるに、徒らに先づ其の周邊に散點せる幾多の雜肋によつて、既に已に迷離目眩せしめしの奇觀あるにあらずや。敢て問ふ、滿天下幾多の所謂山陽研究者諸君、以て何如とかなす。

余はまた、此の遂豕錄を手にしたる際、忽ち一つの疑惑が起つた。それは、彼の先生の手筆のいやしくも詩文に關するものは、殆んど斷簡零墨と雖も世に流布されてゐるのに反して、獨り此の遂豕錄の如き主腦の著述だけ今日まで埋沒されてあつたのは、何たる事ぞ。恐らくば、之を揀擇し表章するに、門下に其の人なかりしがためなりしかと。案に伏して遙に先生を想ひ、ために悵然たること之を久うした。已にして本書の後に安政六年門人後藤松陰の附記せる一識語あるを認むるに及んで、始めて稍々蹙眉を開き、覺えず之れある哉と叫んだ。其の文に曰く。

遂豕錄三卷は先師　山陽先生春秋を說き、其の門人聽く者之を筆錄せるもの、機、江（淀江）を下り坂（大阪）に寓するの後、先生の子又次郎兄、手ら謄して之を寄せらる。唐山、（支那を指す）、春秋の傳、多々なりと雖も、元の趙汸、金の鎖匙を除くの外、此の錄の簡明直捷たるがごとき者なし。好む所に阿るの譏は、機の固より辭せざるところ。と。乃ち知る。此の書の早く世に出さるべくして出されざりしは、門人愚なりしがための罪には非ず。知ると雖も而も力足らざりしがためなりしならむことを。

顧ふに、余丱童にして外史の讀を、先人の膝下に受けてより忽々星霜已に五十有餘年を經、近年しばしば大患に罹れるも、幸に天寵の厚き、身未だ死せず。自ら督勵して、斯文斯道のため、聊か事に述作に從ひ、國恩の萬一に報ぜむことを期せるに、今偶ま、鯉城の客寓に在りて、賴家の秘籙の發かるるに會ふことを得、往を憶ひ今を觀じ、身世家國の感慨一時に並び臻りて禁ずべからざるものがあるので、遂に門生を呼んで、吾が所懷の大端を舒べ、之を筆錄せしむる事、斯くの如しと云ふ。

ちなみに、全書卷七は右の遂豕錄の次に孟子評點・古文典型・小文規則・謝選拾遺・唐絕新選・宋詩鈔・浙西六家詩評・韓蘇詩鈔・彭澤詩鈔・錦繡段選選・賴山陽先生一夜話・藝圃茗談の既刊未刊の著述が載せられてあるが、その底本は、孰れも先生の玄孫賴成一君、及び、先生の研究家木崎好尙君の精選になつたもので、無論最も信賴すべきものであらう。凡そ先生の評論は詩といはず、文といはず、其の字法句法文法に就いて、細密に其の獨特の秘訣を漏されてあるのは勿論であるが、別に尙ほ必ず作者其の人の身上より、其の當時の世態にまでも論及してゐる所は、矢張り彼の春秋の筆法論を一切の方面に運用した先生の擅場であつて、明かに其の特色の存する所といはねばならぬ。特に孟子評點や、宋詩鈔などの如きは、此の心得を以つて讀んで行けば、別に一段の興趣の湧出して來るものがあらう。（原生筆錄）

昭和七年壬申十月初五日

廣陵の日章軒に於て

土佐後進　闇然澤識

昭和八年五月四日印刷
昭和八年五月六日發行

發行者　廣島縣廳內
賴山陽先生遺蹟顯彰會
代表者　大田清

印刷者　廣島市塩屋町十二番地
增田計雄

印刷所　廣島市塩屋町十二番地
株式會社　增田兄弟活版所

發行所　廣島縣廳內
賴山陽先生遺蹟顯彰會
電話五七七八番
振替下關六三三〇番

625
340